

■みんなく公開フォーラム「古代文明の生成過程－マヤとアンデスの比較－」
松本雄一（山形大学人文学部人間文化学学科准教授）

2013年1月27日（日）、キャンパス・イノベーションセンター東京において、みんなく公開フォーラム「古代文明の生成過程－マヤとアンデスの比較－」が開かれた。国立民族学博物館と科学研究費補助金基盤研究（S）「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」（代表：関雄二）が主催し、科学研究費補助金新学術領域研究「環太平洋の環境文明史」（代表：青山和夫）が共催、さらに古代アメリカ学会が協力しての開催であった。関雄二（国立民族学博物館教授）、猪俣健（アリゾナ大学教授）、青山和夫（茨城大学教授）、松本雄一（国立民族学博物館機関研究員）の4人が文明の生成過程という共通のテーマで近年の調査成果を紹介し、その後聴衆からの質問をもとに、マヤとアンデスの比較を通じた総合ディスカッションが行われた（肩書きは当時）。参加者は101名であり、大変盛況であった。

また、その関連イベントとして前日の1月26日（土）にワークショップ「古代文明における経済基盤と祭祀」が実施され、「神殿などの巨大公共建造物の成立過程に生業や奢侈品などの経済的な側面がどのように関わっていたか」というアンデスとマヤの考古学に共通する問題が最新のデータを用いて総合的に検討された。

以下で1月27日のフォーラムでの発表について報告する。

・松本雄一（国立民族学博物館機関研究員）

「遠隔地交流と複雑社会の形成－アンデス中央高地の事例から－」

一般に、アンデス考古学においては、チャビン・デ・ワントル神殿の宗教的・文化的な影響が他地域における文明の形成を促したという見方は依然として根強い。しかし、このような視点は高度な文明を有していた中央の社会が、文明形成の途上にある周縁の社会に支配などの形で影響を与えるという単純な、「中央－周縁」の図式にのっとった解釈を産み出しやすい。

松本がとりあげたカンパナユック・ルミは、紀元前1000年ごろペルー中央高地に出現し、その建築はチャビン・デ・ワントルと極めて強い類似性を示す。ただし、その一方で物質文化は在地の伝統を維持していた。このようなデータは、在地の集団とチャビン・デ・ワントル神殿との関係が一方的なものではなく、むしろ在地の側がチャビン・デ・ワントルの新たな宗教体系を積極的に取り込み、その結果両者の交流が活性化したことを示唆している。その後紀元前700年以降は、建築のみならず、土器や金属器などの物質文化及び、黒曜石の交易など経済的な側面でも両者の関係が強まっていたことがうかがわれる。

こうしたカンパナユック・ルミの社会変化は、在地の集団が自ら働きかけてチャビン・デ・ワントルとの関係を構築することで神殿が出現し、続いて今度はチャビン・デ・ワントルの側がそのつながりを利用して経済的な面でも影響を与えてゆくという複雑な歴史的過程を示している。

・関雄二（国立民族学博物館教授）

「アンデス文明における権力の発生－最新成果報告」

続いて関がとりあげたペルー北部高地に位置するパコパンパ遺跡は、形成期（紀元前3000年～紀元前後）の大神殿であり、近年の調査によってアンデス文明の形成過程を解明するための重要なデータが得られている。2009年に発見された金製品を伴う『パコパンパ貴婦人の墓』は、紀元前800年ごろにはこの神殿にある種の宗教的なリーダーが存在していたことを示している。

このような神殿社会における権力の萌芽を示す新たなデータが、2012年の調査においても新たに発見された。副葬品を伴う4つの土壌墓が発見され、内2つは金属製品を伴って

いたのである。2つの金属製品のうち1つは直径2cmの金環で、もう1つは銀製の針であった。これらを伴った埋葬の被葬者は女性だった可能性が高い。さらに銀製の針を伴った墓からは紡錘車も出土しており、被葬者が織物に関係していた可能性を示している。また副葬品として、幻覚剤として用いられたサボテンの図像が施された土器が見つかったが、このことから被葬者がシャーマンのような性格を有していたことがうかがえる。

これらの墓は、神殿建築の最中に埋め込まれた「貴婦人の墓」とは異なり、実際に神殿を動かし、その聖なる空間を利用していた人物の墓である。興味深いことにこれらの埋葬は建築の変化と深く関わっており、重要な人物の死をきっかけとして神殿建築の増改築が行われた可能性が示唆された。これらの埋葬は「貴婦人の墓」の発見で示された権力の発生という仮説を補強しており、その上で神殿の建築活動と権力との関わりを具体的に示す重要なデータである。



(写真提供：科学研究費補助金基盤研究(S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」プロジェクト)

・青山和夫（茨城大学教授）

「石器研究からみるマヤ文明の盛衰」

マヤ文明（前1000年～16世紀）は、世界の他の古代文明と異なり石器を主要利器とする新石器段階の技術と人力エネルギーの都市文明であった。南北アメリカ大陸において文字、算術、暦、天文学を最も発達させると共に、ゼロの概念を独自に発明したマヤ文明は、人類史上最も洗練された「究極の石器の都市文明」と位置付けることができる。

マヤ文明の政治経済組織を解明するためには通時的研究が必要不可欠であり、また同時に、一遺跡に焦点を当てた「点の考古学」だけではなく、一つの広範な地域に焦点を当てた「面の考古学」の調査を実施していかなければならない。

コパン遺跡とラ・エントラダ地域の調査（1986～1995年）においては、石器に見られる使用痕の体系的な分析と高精度の産地同定を行い、黒曜石製品の生産活動及び流通を実証的に考察した。その結果黒曜石製品の国家による流通の統御、その劇場パフォーマンスにおける重要性、都市における経済組織の実態などが明らかとなった。

810年頃の戦争で短時間のうちに放棄されたアグアテカ遺跡の調査においては、支配者層の間で手工業生産が広く行われていたことが明らかとなり、複数の社会的役割を有するマヤの支配者層の権力のあり方が浮き彫りとなった。

セイバル遺跡では、マヤ文明が従来の説より数百年早く、紀元前1000年ごろに興ったことが確認された。先古典期中期前半（紀元前1000～700年）には複雑な政治経済組織が確立し、高地から搬入された黒曜石の石刃核を用いて石刃が生産されていた。また住民は、地元産のチャートを用いた石器の製作を行っていた。先古典期の政治経済組織に関してはこれまで情報が少なかったため、マヤ文明の起源、都市と王権の盛衰などを研究するための重要なデータであるといえる。

・猪俣健（アリゾナ大学教授）

「セイバル遺跡の発掘成果とマヤ文明の起源」

マヤ文明の起源に関しては、マヤ文明がメキシコ湾岸低地南部で栄えたオルメカ文明の影響によって興ったとする説と、マヤ文明がマヤ低地において独自に興ったという2つの説が論点となってきた。しかし、近年のセイバル遺跡の調査によって、マヤ文明成立の背景がこれまで考えられてきたよりも複雑であり、これまでの視点では十分に説明できないことが分かってきた。

セイバル遺跡において、1960年代のハーバード大学の調査成果を踏まえて2005年から新たな調査が開始された。グループAの建築の層位的な発掘調査によって、最初の公共建築がおおよそ紀元前1000年頃に地山を削って建造されたことが明らかとなった。この時期の建築は、後代に他のマヤのセンターで儀礼に用いられた“Eグループ複合”と呼ばれる正方形の建築と細長い基壇の組み合わせであり、現在知られている最古のものである。

セイバル遺跡から得られた新たな絶対年代資料に基づいて、ラ・ベンタを始めとする他の調査の絶対年代を再検討した結果、ラ・ベンタが重要なセンターとして出現したのは紀元前800年ごろであることが判明した。従って、もはやセイバルにおける建築活動の開始をラ・ベンタからの影響とみなすことは難しい。

セイバルの人々は、紀元前1000年頃から公共建築の建造とその後の増改築を開始し、マヤ低地の他地域、近隣のメキシコ湾岸低地南部、メキシコのチアパス高地やグアテマラ高地などの集団と交流していた。そして、その過程で発達した地域ネットワークがマヤ文明の成立に重要な役割を果たしたと考えられる。

以上の発表の後、会場の聴衆より提示された質問やコメントを交えながら、マヤとアンデスを比較するためにいくつかのトピックを設け総合討論を行った。たとえば、巨大なモニュメントが登場する過程を見ると、マヤでもアンデスでも、小型の共同祭祀場を築き、それを更新していく過程で規模を拡大している点では共通しているが、マヤではこの背景にトウモロコシ農耕の確立を強調している点で、アンデスとはやや異なる見解が示された。また、こうしたモニュメントの巨大化と王を初めとするリーダーの出現過程との間にも一定の相関関係があることがわかった。さらに神殿のようなモニュメントで行われる活動でも、マヤ、アンデス双方ともに儀礼用具を含む多様な工芸品が製作された点では類似しているが、マヤでは異様なまでに石器製作に重きを置いている点が特徴的であることが指摘された。これらの点を含め、最後にアンデスたらしめているもの、マヤたらしめているものとは何であるのかについてさまざまな角度から意見が出され、予定時刻を30分ほどオーバーするほど白熱を帯びた議論が展開された。

主催: 科学研究費補助金基盤研究(S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」
(代表: 関雄二)

協力: 古代アメリカ学会